

2018 年 1 月 19 日

「車載式故障診断装置を活用した自動車検査手法のあり方検討会」への自工会意見

一般社団法人 日本自動車工業会

第 1 回検討会において、OBD を活用した電子制御装置の検査手法として、「法定スキャンツールで特定 DTC を検出する手法」が提案されたが、この他にも、「車両に装備されている警告灯の点灯により判断する手法」も考えられる。

双方の手法について、考えられるメリット/デメリットを以下の通りとりまとめたので、これを勘案し、本検討会において双方の案を並行してご議論いただき、最適手法を確立していただきたい。

1. 法定スキャンツールで特定 DTC を検出する手法

法定スキャンツールで特定 DTC を検出する手法は、OBD ポートに法定スキャンツールを接続し、自動車内に記録されている DTC(故障コード)の中でも、性能要件を満たさなくなる不具合を特定 DTC とし、それらを読み取るもの。

	メリット	デメリット
コ ー ザ ー		・ 事前に気付くことなく不合格となる場合があり、理解が得られにくい
検 査 場	<ul style="list-style-type: none"> ・ 検査対象の車載装置が複数となるため、関連の全ての警告灯を目視検査するに比べ、検査員の作業工数が少ない(ツール脱着作業は増加) ・ 故障内容を判読できる 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 法定スキャンツールを準備する必要がある ・ 現在正常状態でも、過去の DTC が残るケースもある
そ の 他		<ul style="list-style-type: none"> ・ 車両と法定スキャンツールの接続の信頼性を確保する必要がある ・ 法定スキャンツールの接続プロトコル等の標準化状況の確認が必要 また、プロトコル仕様の異なる部分は、認定時等に提示し機器側ソフトウェアへ反映していく必要がある ・ 特定 DTC の情報管理、アップデートが必要となり、さらに認証と結びつけることにより、随時特定 DTC リストの更新が必要になり、申請回数が増加する

2. 警告灯の点灯により判断する手法

警告灯の点灯により判断する手法は、自動車内のインストルメントパネルに点灯される対象とする対象装置の警告灯のシンボルを確認するもの。

	メリット	デメリット
コ ザ ー	<ul style="list-style-type: none">・ 検査前に異常を確認でき、事前に対応が可能・ 理解が得られやすい	
検査場	<ul style="list-style-type: none">・ 既に運用されている・ 新たなスキャンツールの導入が不要	<ul style="list-style-type: none">・ 各警告灯の球切れ確認点灯のチェックに工数が必要
その他		<ul style="list-style-type: none">・ 現状、以下の問題があり、メーカーによる警告灯点灯仕様の詳細確認が必要<ul style="list-style-type: none">- 不安全にならない故障でもテルテールを点灯させる場合は不合格となる- 一つのテルテールが複数装置の異常検出を兼ねている場合、非対象装置が確認の対象となるテルテールを点灯させていても不合格となる- 全ての対象装置毎に共通の点灯要件の設定が必要

以上